

これからの「池袋学」

高萩 宏

今年度は秋に立教大学で池袋学の総括としての特別レクチャー「〈池袋学〉をふりかえる―新宿、渋谷、池袋。三つの地域学を比較する―」を行いました。池袋とは異なる新宿の歴史と渋谷の未来が羨ましくありましたが、他所の歴史そして未来構想を聞くと改めて、池袋も歴史的視点から始めて未来へ向けて研究すべき、という思いを新たにしました。

東京芸術劇場では三年間の総括として「都市の体温―池袋の想像力―」と題して、写真家の森山大道氏を招いた講座を行いました。池袋西口にお住まいの森山さんは「池袋駅を中心としたある範囲は、それぞれ顔が違うというか、においも微妙に違う」、池袋にはいろいろなものがレイヤーになっているという感覚があります」とおっしゃっていました。これからの池袋が森山さんの作品にどう残っていくのか楽しみです。

豊島台地という地政学的な特徴、今の東京芸術劇場のあたりにあった丸池が水源の鶴巻川、上がり屋敷という地名が残る将軍家の鷹狩りが行われていた雑司が谷、鉄道のターミナル駅になった経緯、立教大学や自由学園をはじめ教育機関が集まってきた理由、そしてアトリエ付き住宅の建売から始まった池袋モンパルナスについてなど、まだまだ興味深いことは多いです。戦後になると、池袋西口だけ遅くまで残った鬧市、西武鉄道と西武百貨店、そこからのセゾングループ、東武鉄道と東武百貨店、そして『池袋ウエストゲートパーク』と素材は増えていきます。

ビックリガードの南に偉容を現し始めた西武本社ビルは、日増しに高くなっています。二〇一九年の春には一階と二階に商業施設が入る二十階建てのオフィスビルとしてオープンするそうです。ビックリガードを越えて駅まで一直線に伸びる歩行者デッキ、それに直角に交わり、西口までつながる東西デッキの構想も発表されています。池袋西口公園のリニューアルと共に新しい池袋の象徴になっていきそうです。

昨年、二〇一七年の西口商店連合会の新年会で、高野之夫豊島区長の口から飛び出した、池袋西口公園の野外ステー

ジ構想は、一年をかけて実現に向けて順調に歩み続けています。まだまだ公園内の様々なものの移動、クラシック音楽の演奏を楽しめるステージの形など課題も多いようですが、池袋西口を池袋の裏口にさせない、という区長の熱い思いは伝わってきます。二〇一九年の十一月には、グローバルリングを戴いた、モダンな公園に生まれ変わるはずです。西口公園は、二〇二〇年のオリンピック・パラリンピックの時には、都内八箇所で行われるパブリック・ビューイングの一つの会場にも選ばれそうです。

東京芸術劇場は二〇一七年度には公演事業として石田衣良さんの『池袋ウエストゲートパーク（IWGP）』をもとにした音楽劇の創造を試みました。数年のワークショップを積み重ねてきた上で、二〇一七年の年末から翌年一月十四日まで、一人近い方にご覧いただきました。「IWGP」は、二十年ほど前に石田衣良さんによる小説の連載が始まり、二〇〇〇年には宮藤官九郎さんの脚本でテレビドラマ化され、あつという間に全国区の作品になりました。実際以上に強調されたカラーギャングの抗争を見に、全国から人が押し寄せ、池袋のイメージもかなり危ない場所として固定されてしまったようですが、若者の活気にあふれた町としての池袋のイメージが全国に広がり、その池袋にあこがれて上京してくる若者も増えたようです。

『池袋ウエストゲートパーク』のテレビ放映が始まった後、その悪いイメージを変えるべく、豊島区観光協会、地元の商店街や町会がまとまり、安全な町へのパトロールやみんなが参加できるイベントの開催へとつながっていったと聞いています。今回、公演の千秋楽を前に豊島区長、池袋警察署長、豊島区観光協会前会長の三人がそろって見に来てくださり、三人が三人とも立教出身だと聞いて驚きました。東京芸術劇場としては、何とかこの作品をプレイハウスで繰り返し上演できる作品に育てていきたいと思っています。

二〇一八年、立教学校が築地居留地から池袋に移ってきてちょうど百年です。ゴールデンウィークには、西口の再開発のとりまとめをしてくれている三菱地所だけでなく、東武鉄道もスポンサーに名を連ねたラ・フォル・ジュルネも開催されます。秋には池袋の西口で東京都交響楽団を主体とする大規模音楽祭も始まる予定です。

これで一区切りの「池袋学」ですが、これからも少し形を変えて、今までの池袋を検証しながら、未来につながる池袋について考えていきたいと思っています。